

十二月九日

八時四十五分世田谷村発。十時前羽田空港。MSP(マツダ店舗開発機構)野口社長と会う。十時三〇分福岡へ。十二時過福岡空港着。機内ではグッスリ眠る。O夫人迎えて下さり、昼食後、現場へ。淡路島の山田脩二氏と会う。タイル屋さんと打合わせ。塗装屋さんと打合わせするも仲々距離がある。アトム部長氏と打合わせ。家具屋さんと綿密な打ち合わせ。他、十八時迄。寒い。十九時前ホテル、チェックイン。O夫人とまめ丹へ。夕食。二十一時過了。二十一時半ホテルに戻る。設計、施工共に上手く行っているのだが、仕上げの微妙さに関して大きな不安が頭をもたげられる。工業製品の仕上げに関しては選べばそれで終わりなのだが、現場でニュアンスを作り出さねばならぬ部分を残すのが私の方法だから、その部分でのニュアンスの合意を作り出すのが仲々に困難なのだ。

それぞれの現場で、材料の加工具合の最終的な加減、職人さんの技量との合い加減との組み合わせ、微妙な色出し、光沢の具合等を決めるダイゴ味こそが現実の建築デザインの特権であろうと思われるが、どうだろうか。オフィスの中のデスク上ですべて決められるような事だけで出来てしまうのは、生きた建築にはならない。

一つの材料の加工具合のニュアンスを決めるのにも無限に近い、例えば光の変化との適応性等の変幻への読みは、現場に立たなければ、そして読み切る力を使い切る努力をせねば得られない。ま

だ私などには得られぬ体験ではあるが。

建築が他の何よりも面白いなにかがまだあるとするならば、それは個々の現場「場所」時間を持つという事、それに対する個々の想像力を駆使し得るといふ事ではなからうか。二十三時前、眠ろうとする。

十二月十日

七時半目覚める。昨日現場に居た時、無数の視線が動いているのを実感した。見学者の眼、隣のマンションからの眼、前の道路からの眼、眼、眼。これが都市内建築が対面する新しい事態だな。ドライに言えばセキュリティ。空間の詩として言えば、夜も昼も千の眼を持つ事への対応。

個人の自由の確保は密閉された箱以外にないのかって言う事でもある。

九時ホテルレストラン朝食。十時過Oさんにピックアップされ、十時二〇分現場。昨日に引き続き蔭久、馬場棟梁と打合わせ。塗料屋さん色出し、他。十二時過Oカンサイ社長現場へ来る。山中で寿司の昼食。カンサイ、ビジネスの将来を示す小冊子の提案。やってみて下さいとの事。山中のオヤジさんから磯崎さん上海からの帰りに寄られた話等聞く。山中は良い店になっていて、今や福岡の名所だそうだ。福岡場所では横綱朝青龍まで来ているとの事。十四時現場に戻る。打ち合わせ続行。十七時過迄。名残りは惜しいが疲れた。福岡空港十八時。十八時四〇分の便で東京へ。機内でなにがしかの原稿書く。二十二時前世田谷村に戻る。